
不眠薬

こめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不眠薬

【Nコード】

N8072B

【作者名】

こめ

【あらすじ】

寝る時間さえもつたいないの思いから、不眠薬を飲んだ浪人生の男。——その意外な結末とは!?

(前書き)

お気軽に評価、もしくは酷評をください。

ここが正念場だ！ と、浪人生の彼はそう思う。

なんせ、志望の大学を四年も連続で落ちているのだ。おそらくは気力の面からいっても、今年が最後のチャンスに違いない。

彼は「合格」と記された手拭いを頭にキリリと結びなおし、机上の参考書に向きあった。

が、朝からずっと受験勉強に首っぴきで集中力が続かない。

壁の掛時計の針は午前一時。――眠い。自然と瞼は重くたれ下がってくるし、眼球は赤く充血している。

受験生、とくに浪人生は寸暇を惜しんで努力しなければならないというのにダウン寸前だ。これではいけない。

彼は濃いめのブラック・コーヒーを作って、たてつづけに二杯飲み干した。

そして立ち上がり、走りだす。狭い部屋の中をグルグル、グルグル、走り回り続ける。眠気覚ましのため。

しかし、やる気とは裏腹にますます意識はぼんやりとし始めた。ベッドがおいおいでと手招きしている。

彼に逆う力などありはしない。その上へ、ゆっくりと倒れ込んでいく……。

気が付いた時、外はもう明るかった。窓からさす日差しが目には痛い。

遠くの方から聞こえてくるのは、昼の十二時を知らせる鐘の音なのだろう。

「なんてことだ、これじゃあ今年もダメではないか」彼はベッドの上に半身を起こし、おのれの不甲斐なさに齒がみした。

「よし、こうなったら」と言うなり階下へ赴き、玄関の電話に手のばす。

「んっ、どうした。なんの用じゃ」送話口から彼の父であるI氏の声がもれた。――I氏は、某大学の薬学部で教授を勤めている。

「お父さん、いきなりで悪いんだけど頼まれてくれないかい」

「なにを、じゃ」

「あのね、お父さんのところで不眠薬は作れないかな」

「なぬ、不眠薬じゃと」受話器ごしに声がはねあがった。「それは不眠症の治療薬の間違いではないのか」

「違うよ。不眠薬だよ不眠薬。つまりは、睡眠薬と逆のものだよ。どうなの、出来るのできないの」

「うむ。出来ないことはないが、いったいそんなものなんに使うつもりじゃ」

「できるんだね。だったら、いっこくも早く作ってくれる。頼んだよ」彼は用件をつけると、慌ただしく受話器を架台に叩きつけた。

わずかの間も、惜しいのだった。志望大学の入学試験は半年後である。

彼は飯と糞と風呂を計十分で済まし、自室へ駆けもどった。

脳裏には、バラ色の学園生活が渦巻いていた。

翌日、またしても彼は床の上で寝息を立てていた。

部屋の戸をノックする音で目が覚めた時は、またもや昼前。

「うわあああ、またやってしまった。またやってしまった」と、わめきながら戸を開ける。

細長いフラスコを片手にI氏が突っ立っていた。「ほれ、頼まれたものじゃ」

「へえ、もう完成したんだ」I氏から受け取ったフラスコをつくづくと眺める。――なかで、紫色の液体がブクブクと泡立っていた。

「これって、本当に不眠薬。なんか違う薬じゃないよね」恐るおそる尋ねる。

「なにを言うか。父を信用せんのなら、返せ」たちまちI氏は気色ばんだ。

「じよ、冗談だよ。冗談」彼は引ったくられそうになる菓を慌てて懐にかき抱く。「それじゃあ、効果のほうもバッチリなんだね」

「やはり、何からなにまで疑っとるのだな」

「いえいえ、めっそうもございません」彼はI氏の機嫌を取りなそうと、お世辞を並べ立てた。「なにせ、お父うえは頭脳明晰で博覧強記で聖人君子で、そのうえ」

「ああ、もういい」I氏は彼にストップをかけ、菓の説明を始める。

「そのフラスコには目盛りの線引きがしてあるじゃろ」

「ええ。そうですね」

「そのひと目盛りで一ヶ月。全部で十二の線引きがしてあるから、つまり、それだけで一年分の不眠効果が得られるというわけじゃ」

「へえ、たったこれだけの量でそんな長い不眠効果が得られるのか。すごいなあ」彼はおおげさに感動してみせた。

「そうじゃとも、そうじゃとも」大学教授らしからぬ単純さですぐに機嫌を直したI氏は、自慢気に何度もうなずく。そして、腕時計をのぞき込んだ。「いかん、昼休みも終わりじゃ。急いで戻らねば、午後の講義に遅れる」

どうやら勤めている大学が近所ということで、昼休みを利用しての帰宅らしい。

I氏はドタバタと階段を駆け下りていった。

「落ち着きのないオヤジだ」彼はI氏の後ろ姿を見送ったあと、フラスコの液体を一息に飲み干した。そして、気が付いた。「げっ、そうだこれは一年分だったんだ」

しばし、黙考する。

「まっ、いいか。一年ぐらい寝なくたって。不眠で得られた時間の半分は受験勉強に、残りの半分は大学生活をエンジョイするために使えばいいんだ。そうだ、そうだとも」うししししと彼は声を出して笑い、机上の参考書を開いた。

これからはたっぷり時間が取れるぞ、と思った。

それから三ヶ月後。彼の勉強は、まるでかどっていなかった。不眠に失敗したわけではない。薬はバツグンに効いた。ずっと起きっぱなしである。

しかし、眠気がまったく取れなかったのだ。日毎に増していく。つまりは読んで字の如くの不眠薬。薬は彼を完璧な不眠症にしただけだった。ヒドイ話である。

まずはその日の夜にモーレッツな眠気に襲われ、受験勉強を放り出しベッドへもぐり込んだ。一時間が経ち、二時間が経過しても目は覚めたままだった。

これに腹を立てて起き上がり、ふたたび机上の参考書に向き合った。が、頭はひどく混濁しているもんだから勉強なんて手に付かない。

そして一周間目盛りからは勉強する気力が消え失せ、食欲さえもなくなってきた。

幻覚が見え出したのは一ヶ月が過ぎた頃だろう。小人の軍隊が部屋を横切り、ピンクの象によるタップダンス・ショーの開演である。今、彼は部屋の隅にうずくまりガタガタと震えている。

「くそお、あの馬鹿オヤジ」宙の一点を無意味に見つめた。「なにがこの薬の効果は絶大で、解薬不可能だ、まったく。俺はこれから先……。うぎゃああああああ、サ、サメの大群だあああああ。人食いサメの大群だあああああ」

彼は頭を抱え込んで絶叫した。その目は病的に赤黒く濁って、頬はゲッソリとこけ、髭はボウボウに伸び放題だ。

最後にいつ食事をしたのかも、覚えていない。

とその時、サメの大群の後ろから大鎌を肩にかついだ黒マントの骸骨が現れた。それは、だんだんと近付いてくる。

これで彼の志望大学合格の夢は、叶わぬものとなってしまった。

一生……。

黒マントの骸骨は死神であり、しかも、それだけは幻覚じゃなかったのだ。

【了】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8072b/>

不眠薬

2010年10月8日15時06分発行